

『御堂関白記』に見られる病氣・怪我に関する表現

A Study of *Midôkanpakuki* : Its Word Idiom of “Disease” and “Injury”

(1993年4月7日受理)

清水 教子

Noriko Shimizu

Key words: 所悩 (なやむところ), 所勞 (いたはるところ)

一 本稿の目的と今後の課題

本稿の目的は、平安時代第三期¹、一条朝(986年～1011年)の前後、すなわち摂関政治の全盛期における公卿藤原道長(966年～1027年)の記した『御堂関白記』(以下、本文献と呼ぶことにする。998年～1021年の記事、道長33歳～56歳)に見られる病氣・怪我(治療方法は除く)に関する表現について記述することである。

今後の課題は、本文献と同時期の他の記録語文献、藤原実資(957年～1046年)の記した『小右記』(982年～1032年の記事)や藤原行成(972年～1027年)の記した『権記』(991年～1011年の記事)に見られる病氣・怪我に関する表現と比較検討し、三者間の共通点と相違点(個性差)とを明らかにすることである。

なお、本稿の作業には『御堂関白記』上中下の3冊²を用いた。具体例の引用は、例えば寛弘元年6月5日の記事「只今参間 一条橋下覆車 面所所有損所」(上93ページ)の場合、(寛弘元6/5上93)と記することにする。そして、漢字は可能な限り常用漢字の字体に、踊り字(漢字一字の繰り返し符号)とはそれ相当の漢字にそれぞれ改めた。具体例中の下線や波線は私に記したものである。又、単語の読みの決定には、従来どおり『字葉字類抄³』『名義抄⁴』『節用集⁵』『日葡辞書⁶』『大漢和辞典⁷』などを参考にした。

二 病氣・怪我に関する表現の実態

本文献における病氣・怪我に関する表現の実態として、主語と述語、目的語と述語、修飾語と被修飾語などの関係において、それぞれどんな単語と一緒に用いられているかを中心に考察する。なお、異なり語数・延べ語数などは巻末に一覧表として示す。

1 名詞(相当語)を中心に

病氣・怪我に関する名詞(相当語)は、和語として足(あし)・面(おもて)・頭(かしら)・腰(こ

し)・舌(した)・脛(すね)・歯(は)・鼻(はな)・膝(ひざ)・耳(みみ)・胸(むね)・目(め)・眼(まなこ)など身体部位を示すもの13語、心地(こち)・心(こころ)など精神に関するもの2語、
 労(いたはり)・風(かせ)・疵(きず)・太波事(たはこと)・悩氣(なやましけ)・悩(なやみ)・
 腫物(はれもの)・病(やまひ)・咳病(しはふきやみ)・瘡病(わらはやみ)・殊事(ことなること)
 など11語、併せて異なり語は26語である。字音語として霍乱(クワ克蘭)・時行(シキヤウ)・疾疫
 (シツエキ)・頭風(ツフ)・熱(ネツ)・病死(ヒヤウシ)・病者(ヒヤウシヤ)・病悩(ヒヤウナ
 ウ)・風病(フヒヤウ)・痢病(リヒヤウ)など10語、邪氣(シヤケ)・心神(シンシン)など2語、
 行歩(キヤウフ)・暗夜(アンヤ)など2語、併せて異なり語は14語である。これら40語のうち延べ語
 数の比較的多いものは、和語として悩(46例)・心地(35例)・殊事(25例)・病(23例)・目(14例)・
 咳病(12例)・足(11例)・胸(7例)・歯(6例)の9語、字音語として心神(33例)・風病(14例)・
 霍乱(6例)・時行(4例)・頭風(4例)・痢病(4例)の6語であり、併せて15語について以下に
 取り上げる。

(1) 和語——悩・心地・殊事・病・目・咳病・足・胸・歯(9語)

①悩(なやみ)は「此日久主御悩極重」(寛弘八6/13中110)のように形容詞重(おもし)が述語に
 なっているもの22例、「従今朝御悩頗宜」(長和二5/25中225)のように形容詞宜(よろし)が述語になっ
 ているもの4例、「大内御悩発御云云」(長和元7/20中161)のように動詞発(おこる)を述語として
 いるもの2例などである。

②心地は「病者心地兩三日宜者」(寛仁二10/11下178)のように宜(よろし)を述語とするもの19例、
 「為職従一条消息 老者御心地従昨日重者」(長和五7/3下67)のように重(おもし)を述語とする
 もの5例、「東宮御心地非例御座 仍候宿」(寛仁二8/13下172)のように非例(レイにあらず)を述
 語とするもの4例、「従内退出 中宮御心地無殊事」(長和元10/9中170)のように無殊事(ことなる
 ことなし、別にたいしたことはないの意)を述語とするもの3例などである。

③殊事(ことなること)は「大将心地今日無殊事」(長和四12/14下36)のように無(なし)を述語
 とするもの17例、「有内御耳悩給御消息 乍驚参 依殊事不御退出」(寛仁三2/24下196)のように尊
 敬語御(おはす)を述語とするもの4例、「東宮御脛有小熱給物 仍召医師問案内 殊事不御座者」(寛
 仁二3/26下150)のように尊敬語御座(おはします)を述語とするもの4例である。

④病(やまひ)は「民部卿依有病 不着字治」(長保元3/2上18)のように動詞有(あり)を述語
 とするもの5例、「左兵衛督依母病重申可献五節舞姫障」(長和五11/12下81)のように重(おもし)を
 述語とするもの3例、「民部大輔為任 从去年三月不参内 無殊病云云」(寛弘三6/13上182)のよう
 に無(なし)を述語とするもの2例、「右大臣童女等称病由不参」(長和二11/15中251)のように称(シ
 ヨウす)を述語とするもの2例、「従亥時許悩胸痛甚重 丑時許頗宜」(寛仁二4/9下153)のように
 悩(なやむ)を述語とするもの1例、「従巳時許 胸痛発動 辛苦終日」(寛仁三正/17下192)のよう
 に発動(ハツトウ)を述語とするもの1例などである。

⑤目(め)は「御覧左右御馬云云 所労給御目宜歟」(長和四6/4下12)のように労(いたはる)
 と一緒に用いられているもの(この場合は目の修飾語)4例、「心神如常 而目尚不見 二三尺去人
 顔不見 只手取物許見之 何況庭前事哉」(寛仁三2/6下194)のように見(みゆ)を述語とするもの
 3例、「而今日所悩給御目殊暗云云」(長和四4/13下9)のように悩(なやむ)と一緒に用いられてい
 るもの2例、「件経書外題 依目暗極別様也 而依有気色書之」(寛仁三正/15下192)のように暗(く

らし)を述語とするもの2例,「只皇后宮大夫一人不候 是去年依突目 日来籠居也」(長和二正/10中194)のように突(つく)を述語とするもの1例,「出東河解除 是月来間目不明 仍所祓也」(寛仁二11/6下185)のように明(あかし)を述語とするもの1例,「如昨今日日来勞給御目尚重」(長和四3/20下5)のように重(おもし)を述語とするもの1例などである。

⑥咳病(しはふきやみ)は「從夜部悩咳病 今朝難堪」(寛弘四正/17上206)のように悩(なやむ)を述語とするもの5例,「日来依咳病重 今日遲参」(寛仁二8/27下173)のように重(おもし)を述語とするもの3例,「從昨夜有咳病氣」(長保元3/16上19)のように有(あり)を述語とするもの1例,「咳病重發動」(寛弘二12/8上167)のように發動(ハットウ)を述語とするもの1例などである。

⑦足(あし)は「所勞足未踏立」(長和四閏6/27下17)のように勞(いたはる)が足を修飾しているもの4例,「行二条見造作 右衛門督同車 足同依難堪 從車不下」(長和四7/17下20)のように難堪(たへかたし)を述語とするもの2例,「所勞足雖頗宜 行歩難堪 乗車」(長和四7/15下19)のように宜(よろし)を述語とするもの2例,「落北屋打橋間 損左方足 前後不覺」(長和四閏6/19下16)のように損(そこなふ),「法興院御八講初 所勞足未踏立 仍不参入」(長和四閏6/27下17)のように踏立(ふみたつ),「初参大内 足猶不堪 早退出」(長和四7/21下20)のように堪(たふ),「夜間足腫痛不知為方」(長和四閏6/20下16)のように腫痛(はれいたむ)各1例などと一緒に用いられている。

⑧胸(むね)は「從夜部中宮悩御胸 通夜及寅時」(寛仁元9/8下116)のように動詞悩(なやむ)を述語とするもの5例,「從辰巳時例胸發動 前後不覺」(寛仁三正/10下192)のように發動(ハットウ)を述語とするもの2例である。

⑨齒(は)は「依内御齒惱給参入」(寛弘五4/7上255)のように悩(なやむ)を述語とするもの3例,「今日太裏令取御齒云云」(長和元2/8中137)のように取(とる)2例,「中納言御齒持令見 是依仰也云云」(長和元2/8中137)のように持(もつ)・見(みす)1例とそれぞれ一緒に用いられている。

(2) 字音語——心神・風病・霍乱・時行・頭風・痢病(6語)

⑩心神(シンシン)は「其後風病發動 心神不宜」(寛仁二正/25下138)のように宜(よろし)11例,「亥時許忽惱霍乱 心神不覺 通夜辛苦」(寛弘元7/2上98)のように不覺(フカク)8例,「從曉痢病 心神非例 仍罷出」(寛弘三7/7上184)のように非例(レイにあらず)5例,「心神依悩 不参彼宮」(長和二正/27中199)のように悩(なやまし)4例などを述語としている。

⑪風病(フヒヤウ)は「雖風病發動 参中宮」(寛弘八11/20中125)のように發動(ハットウ)10例,「行一条 風病發動給」(長和五8/17下72)のように発(おこる)3例などを述語としている。

⑫霍乱(クワクラン)は「東宮霍乱惱給」(寛弘元閏9/25上112)のように悩(なやむ)を述語とするもの4例,「從其後心神不覺 如霍乱」(寛仁三2/3下194)のように如(ことし)を伴うもの1例などである。

⑬時行(シキヤウ)は「院有御悩 是似時行」(寛仁元4/21下101)のように似(にる)2例,「大將日来有悩氣 而今日極重者 是時行欲愈歟」(長和四12/12下36)のように愈(いゆ)1例,「無詩宴云云 依時行者」(長和四8/10下22)のように理由を示す依(よる)1例と一緒に用いられている。

⑭頭風(ツフ)は「酉時許雨止 其間頭風發動 悩間 兼經朝臣来云」(長和元8/13中164)のよう

に発動（ハットウ）2例、「頭風発 仍不参円融院」（寛弘四2／12上210）のように発（おこる）1例、「頭風尚難堪 仍無他行」（長和元8／14中164）のように難堪（たへかたし）1例を述語としている。

⑮痢病（リヒヤウ）は「参東宮後 冷泉院痢病悩御由示来 仍参入」（寛弘六9／4中17）のように悩（なやむ）3例を述語としている。

以上、名詞（相当語）を中心に見た場合、和語9語・字音語6語併せて15語に共通して用いられているのは、悩（なやむ）7語（④病⑤目⑥咳病⑧胸⑨齒⑫霍乱⑮痢病）、発動（ハットウ）5語（④病⑥咳病⑧胸⑪風病⑭頭風）、重（おもし）5語（①悩②心地④病⑤目⑥咳病）、宜（よろし）4語（①悩②心地⑦足⑩心神）、有（あり）3語（①悩④病⑥咳病）、発（おこる）3語（①悩⑪風病⑭頭風）などである。つまり、動詞は悩・発動・発・有の4語、形容詞は重・宜の2語と比較的よく一緒に用いられている。

延べ語数の観点から見ると、①悩は有（40例）、②心地は宜（19例）、③殊事は無（17例）、④病は有（5例）、⑤目は勞（4例）、⑥咳病は悩（なやむ5例）、⑦足は勞（4例）、⑧胸（むね）は悩（なやむ5例）⑨齒は悩（なやむ3例）、⑩心神は宜（11例）、⑪風病は発動（10例）、⑫霍乱は悩（なやむ4例）、⑬時行は似（2例）、⑭頭風は発動（2例）、⑮痢病は悩（なやむ3例）とそれぞれよく一緒に用いられている。

2 動詞（相当語）を中心に

病氣・怪我に関する動詞（相当語）は、和語として勞（いたはる）・痛（いたむ）・愈（いゆ）・得（う）・失（うしなふ）・打（うつ）・打破（うちやふる）・起（おく）・発（おこる）・知（しる）・損（そこなふ）・堪（たふ）・垂（たる）・突（つく）・取（とる）・悩（なやむ）・成（なる）・似（にる）・吐（はく）・腫（はる）・冷（ひやす）・踏立（ふみたつ）・見（みゆ）・病（やむ）など24語、字音語として減（ケンす）・辛苦（シンク）・発動（ハットウ）・平復（ヘイフク）など4語である。これら28語のうち、延べ語数の観点からは悩・勞・発・発動などが多いが、和語として悩（106例）・勞（53例）・発（19例）・得（4例）・成（3例）・知（2例）・損（2例）・堪（2例）・失（1例）の9語、字音語として発動（17例）・平復（4例）・減（1例）・辛苦（1例）の4語、併せて13語を取り上げる。

(1) 和語——悩・勞・発・成・知・得・損・堪・失（9語）

⑯悩（なやむ）は「依有日来悩事不他行」（長和元3／11中142）のように「有悩事」（なやむことあり）の形40例、「早朝参冷泉院 雖御悩重 未時罷出 是日来有所悩 久候不能 仍退出」（寛弘八10／19中123）のように「有所悩」（なやむところあり）の形14例、「左中弁来門外云 齋院長官為理日来有所勞 不参院 令申云 所悩猶重 非可供奉祭者」（寛弘八4／10中100）のように「所悩」（なやむところ）3例などである。すなわち、形式名詞事（こと）を修飾するもの40例、形式名詞所（ところ）を修飾するもの17例がある。あと具体例は省略するが、悩の対象としては前記1で記したように、心神（4例）、齒・胸・霍乱・痢病（共に3例）、咳病（2例）、腫物・耳・目・癰病・風病（共に1例）がある。

⑰勞（いたはる）は「有足下所勞 不能束帶」（寛弘七8／21中72）のように「有所勞」（いたはるところあり）22例、「又頭中将云 昨日使經親申所勞侍」（長和二2／9中201）のように丁寧語侍（はへり）

の場合1例、「定申相撲事 定申云 世間病事甚盛 可被止 加又有所勞御座者」(長和四閏6/5下15)のように尊敬語御座(おはします)の場合1例、「所勞足雖頗宜 行歩難堪」(長和四7/15下19)のように所が関係代名詞的な働きをしているもの8例(被修飾語は足5例・目2例・膝1例)、「春宮大夫有勞事退出」(寛弘三正/16上173)のように「有勞事」(いたはることあり)15例、「於勞事坐如何」(寛弘八3/12中96下)のように尊敬語坐(おはす)の場合1例、「此間有相撲召合如何 可定申 又加勞御座御目日来猶重者」(長和四閏6/4下14)のように目を被修飾語とするもの2例などがある。

⑮発(おこる)は「日来風病発 今日宜」(寛弘七8/3中71)のように風病(フヒヤウ)3例、「大内御惱発御座云云」(長和元7/18中161)のように惱(なやみ)3例、「頭風発 仍不参円融院」(寛弘四2/12上210)のように頭風(ツフ)1例、「白地退出間 瘧病已発了 仍還参」(寛弘八7/25中115)のように瘧病(わらはやみ)1例、「参太内 御風発給 是日来依召氷也」(寛仁二4/20下155)のように風(かせ)1例などを主語としている。

⑯成(なる)は「從中宮人來申云 有御惱 即参入 宜御座 参入後成平常給」(寛弘元8/21上104)のように平常(ヘイシヤウ)1例、「御惱日日宜成給」(長和五9/16下75)のように宜(よろし)2例をそれぞれ補語としている。

⑰知(しる)は否定形不知(しらす)の形で、「辰時許与女房從中宮 後終日有惱事 無其所心神不覺 不知為方」(寛仁二4/10下153)のように為方(せむかた)2例、「亥時辰巳方有火 從其後心神不覺 如霍乱 不知前後 仍罷出」(寛仁三2/3下194)のように前後(センコ)1例を目的語としている。「せむかたを知らず」はどうしていいかわからない(ほどの状態であること)、「センコを知らず」は何が起こったか少しも気付かず正体がないという意味である。

⑱得(う)は「又仰云 若得尋常秋可有也云云」(長和四3/20下5)「告文云 有所勞御延引 得尋常以秋可有行幸云云」(長和四4/27下6)のように、尋常(シンシヤウなること)を目的語としている。

⑲損(そこなふ)は「從前僧正許 以円觀消息 只今参問 一条橋下覆車 面所所有損所」(寛弘元6/5上93)のように身体部位は面(おもて)で、「有損所」(そこなふところあり)の形1例、「落北屋打橋間 損左方足 前後不覺」(長和四閏6/19下16)のように足を目的語とするもの1例である。

⑳堪(たふ)は「初参太内 足猶不堪 早退出」(長和四7/23下20)のように足を主語とするもの1例、「又胸発動 極不堪」(寛仁二5/18下163)のように胸を主語とするもの1例である。

㉑失(うしなふ)は「如前着座間 忽有惱事 心神失度」(長和二7/10中233)のように度(ト)を目的語とするもの1例である。「度を失ふ」とはうろたえて取り乱すことである。

(2) 字音語(漢語サ変動詞も含む)——発動・平復・辛苦・減(4語)

㉒発動(ハツトウ)は「舞姫兩三昇後 依風病発動退下」(長和元11/20中182)のように風病(フヒヤウ)11例、「頭風発動 不参御齋会結願」(長和五正/14下41)のように頭風(ツフ)2例、「又胸発動 極不堪」(寛仁二5/18下163)のように胸2例、「咳病重発動」(寛弘二12/8上167)のように咳病(しはふきやみ)1例、「日来熱発動 無他行」(寛仁二4/6下152)のように熱(ネツ)1例を主語としている。

㉓平復(ヘイフク)は「而長谷僧正重惱者 即馳向 其惱事從去年七月也 而未平復」(寛弘五6/13上259)のように其惱事(そのなやむこと)1例、「日来御齒惱給 大腫也 召阿闍梨尋〔心〕 譽奉仕加持間 勿〔忽〕以平復 嚴德〔驗得〕無極」(長和元5/9中153)のように齒1例、「資平朝臣云

有申奉令平復御目者」(長和四閏6/13下15)のように目1例(この場合は目的語),「式部卿宮出家此兩三年之際有病 依不平復 被遂本意云云」(寛弘七10/9中77)のように病(やまひ)1例をそれぞれ主語としている。

㉗辛苦(シンク)は「従已時許 胸病発動 辛苦終日」(寛仁三正/17下192)1例のように,胸病(むねのやまひ)を連用修飾語としている。

㉘減(ケンす)は「而今日所悩給御目殊暗云云」(長和四4/13下9)の記事の後に「七壇御修善結願 僧等賜度者 勞給尚無減氣」(長和四5/10下11)とあるように,三条天皇の目の病が主語で「無減氣」(ケンするケなし)の形で述語となっている。症状が軽くなる様子がないという意味である。なお減は直接には氣を修飾している。

以上,動詞(相当語)を中心に見た場合,㉖悩(なやむ)は悩事(24例)・所悩(17例),㉗勞(いたはる)は所勞(22例)・勞事(15例)のように形式名詞「事」又は「所」を伴うものが,他の単語を伴う例よりもはるかに多い。又,所勞には関係代名詞的な働きもある(例——所勞足)。又,㉙発動(ハツトウ)は風病(11例)を主語とするものが多い。

3 形容詞(相当語)を中心に

病氣・怪我に関する形容詞(相当語)は,重(おもし63例)・宜(よろし38例)・難堪(たへかたし10例)・明(あかし4例)・悩(なやまし4例)・暗(くらし3例)・無力(ちからなし2例)の7語であり,このうち用例数の多いものは重と宜の2語である。なお,混種語として如例(レイのことし——連語1例)がある。

(1) 和語——重・宜・難堪・悩・明・暗・無力(7語)

㉑重(おもし)は「参冷泉院 御悩甚重 雖然日来有勞事退出」(寛弘八10/19中123)のように悩(なやみ)20例,「被東宮傳來 帥宮重悩給者」(寛弘四10/2上234)のように悩(なやむ)10例(この場合は修飾語),「心營律師奉仕大内御修善 是所勞給御目依逐日重也」(長和四5/15下11)のように目(め)3例,「而咳病尚重 仍申障由」(寛弘二12/10上167)のように咳病(しはふきやみ)3例,「本是人長上手 依病重年老不奉仕」(寛弘六11/22中29)のように病(やまひ)3例,「彼上御心地猶以重」(長和五7/18下69)のように心地(こち)2例,「臨曉行大将方 悩氣尚重 邪氣重見由 仍令成祈間遷人頗宜」(長和四12/13下36)のように邪氣(シヤケ)2例などを主語としている。

㉒宜(よろし)は「右大臣被來 心地依宜 出為対面」(寛仁二閏4/24下161)のように心地(こち)11例,「心神尚不宜 雨下」(寛仁元5/4下103)のように心神(シンシン)11例,「御出家後 御悩頗宜 是奉奇見」(寛弘八6/19中11)のように悩(なやみ)6例,「御覽左右御馬云云 所勞給御目宜歟」(長和四6/4下12)のように目(め)2例,「日来風病発 今日宜 仍参大内」(寛弘七8/3中71)のように風病(フヒヤウ)2例などを主語としている。

㉓難堪(たへかたし)は「依所勞足尚難堪不参」(長和四7/2下18)のように足(あし)3例,「九重不静云云 而依所勞膝難堪 令申案内 不参」(寛仁三3/14下198)のように膝(ひざ)1例,あと具体例は省略するが,咳病(しはふきやみ)・胸(むね)・行歩(キヤウフ)・頭風(ツフ)各1例などを主語としている。

②悩（なやまし）は「摂政詣慈徳寺 自心地悩而不参」（寛仁二12／19下189）のように心地（ここち）2例、「心神依悩 不参彼宮」（長和二正／27中199）のように心神（シンシン）1例などを主語としている。

③明（あかし）は「出東河解除 是月来間目不明 仍所祓也」（寛仁二11／6下185）のように目（め）1例、「今日終日祓 吉平給祿 是月来間眼不明 仍所祓也 而未明」（寛仁二11／12下186）のように眼（まなこ）2例など、全4例共に目（又は眼）を主語としている。

④暗（くらし）は「儲官奏文 而今日所悩給御目殊暗云云 仍不奉仕」（長和四4／13下9）のように全3例共に目を主語としている。

⑤無力（ちからなし）は「依有勞不候御共 是除日後不能行歩 又病後無力無極 仍不奉仕」（寛仁元5／12下103）のように、無力（ちからなき）（こと）が無極（きはまりなし）の主語となっている。無力とは元氣のないことを意味している。

(2) 混種語——如例（連語）（1語）

如例（レイのことし）は「入夜從中宮女方退出 亥時許大將忽重悩者 遣人令問 從此夕悩待数吐 只今如例者」（寛仁二9／11下175）のように全1例であり、症状が落ち着いたようである、普通の（病氣でない）状態のようであるという意味である。

以上、形容詞（相当語）を中心に見た場合、②重（おもし）は悩（なやみ20例）、③宜（よろし）は心地（ここち11例）・心神（シンシン11例）をそれぞれ主語とするものが多用されている。

4 形容動詞（相当語）を中心に

病氣や怪我に関する形容動詞（相当語）は、和語として盛（さかりなり）1語（2例）、字音語として不覚（フカク）16例・尋常（シンシヤウ）8例・平常（ヘシヤウ）1例の3語、混種語として例（レイの）1語（1例）である。

(1) 和語——盛（1語）

③盛（さかりなり）は「定申相撲事 定申云 世間病事甚盛 可被止 加又有所勞御座者」（長和四閏6／5下15）のように病事（やまひのこと）、「世間病悩甚盛 此間有相撲召合如何」（長和四閏6／4下14）のように病悩（ヒヤウナウ）をそれぞれ主語としている。

(2) 字音語——不覚・尋常・平常（3語）

⑦不覚（フカク）は「通夜心神猶不覚 從今朝頗宜」（寛仁二4／11下154）のように心神（シンシン）を主語とするもの6例、「尚侍亥時許了由示 数月病 從去三日不覚有如無 是希有事也」（寛弘元2／7上71）「丑時許從院賴清来云 御重者 乍驚参入 奉見不覚御座」（寛仁元5／9下103）のように述語として用いられているもの7例がある。又、前後不覚（センコフカク）の形は「奉仕官奏 此間心神不宜退出 前後不覚悩」（長保元5／20上22）のように悩（なやむ）を修飾しているもの1例、「從辰巳時例胸発動 前後不覚 仍不詣法性寺 入夜頗宜」（寛仁三正／10下192）のように述語として用いられているもの2例がある。不覚は人事不省になるさまである。

㊸尋常（シンシヤウ）は「仰云 女二内親王惱給事得尋常」（寛弘五 4 / 24上257）のように「～（なることを）う」の形が4例、「主上日来不御座尋常 今頗重惱給」（寛弘八 5 / 23中107）のように述語として用いられているものが4例である。

㊹平常（ヘイシヤウ）は「從中宮人来申云 有御惱 即參入 宜御座 參入後成平常給 仍罷出」（寛弘元 8 / 21上104）のように、成（なる）を修飾しているもの1例である。平常は普通の状態であることを示す。

(3) 混種語——例（1語）

例（レイの）は「從辰巳時例胸発動 前後不覺」（寛仁三正 / 10下192）のように、発動（ハツトウ）を修飾しているもの1例である。例（レイの）は、いつもと同じようにという意味である。

以上、形容動詞（相当語）を中心に見た場合、㊺不覺（フカク）は心神（シンシン 6例）を主語とするものが多用されている。

三 注意される表現の類型

ここでは、病気・怪我に関して同じような意味を示す表現の場合、本文献ではどんな類型が用いられているかという観点から記述する。次の二つ、1 有惱事と有勞事、2 有所惱と有所勞、を取り上げる。

1 有惱事と有勞事

有惱事（なやむことあり）は24例、有勞事（いたはることあり）は15例である。「依有日来惱事不他行」（長和元 3 / 11中142）「此一兩日有勞事不他行」（長和元閏10 / 26中176）のように、両者の間に用法差はない。又、惱（なやむ）も勞（いたはる）も病氣するという意味である。

ただし、同じ日の記事の場合は、「右府申云 射〔謝〕座有膝惱事 難列者 以此奏聞 被免了 余有勞事 不奉仕内弁退出」（寛弘二正 / 1上126）のように両者を用いて繰り返しを避けている。

本文献の記者道長は、有惱事の方をどちらかと言えばより好んで用いたと考えられる。

2 有所惱と有所勞

有所惱（なやむところあり）は14例、有所勞（いたはるところあり）は22例である。この用例数は先に1で見たのと逆になっているが、その理由の一つとして形式名詞所（ところ）との結合度が惱（なやむ）よりも勞（いたはる）の方がより強かったことが考えられる。すなわち、後に所勞（シヨラウ）という字音語（病気という意味）は成立した（『平家物語』『日葡辞書』に所収）が、所惱（シヨナウ）という字音語は成立していない。「依有所惱 不參」（長和元 8 / 13中164）「仁王会 依有所勞不參」（寛弘七10 / 4中77）のように、両者の用法に差は見られない。

本文献の記者道長は、有所勞の方を有所惱よりも好んで用いたと考えられる。

四 ま と め

本文献に見られる病氣・怪我に関する表現は、次の3点にまとめることができる。

- 1 病氣するという意味を示す表現は、有悩（なやみあり5例）・悩（なやむ106例）・有悩事（なやむことあり24例）・有所悩（なやむところあり14例）、有労（いたはりあり2例）・労（いたはる5例）・有労事（いたはることあり15例）・有所労（いたはるところあり22例）の8種類である。用例数の上からは、動詞悩（なやむ——どこを悩むかという身体部位を示す言葉を伴うものが多い）が圧倒的に多く、これが代表と言える。
- 2 所労には、所労足のように関係代名詞的な働きをする場合がある。
- 3 同じような意味を示す表現の場合、本文献の記者道長は有悩事、有所労を好んで用いている。

注1 『国史大辞典』第12巻（1991年、吉川弘文館）P439「平安時代」の項

注2 『大日本古記録 御堂関白記上 自長徳四年
至寛弘五年』（P1～P279）、『大日本古記録 御堂関白記中
自寛弘六年
至長和三年』（P1～P258）、『大日本古記録 御堂関白記下 自長和四年
至治安元年』（P1～P231）、いずれも1977年、岩波書店。

注3 中田祝夫・峯岸 萌編『色葉字類抄研究並びに索引本文編』（1964年、風間書房）

注4 正宗敦夫編『類聚名義抄』第1巻・第2巻（1970年、風間書房）

注5 中田祝夫著『改定新版 古本節用集六研究並びに総合索引』（1979年、勉誠社）

注6 土井忠生・森田 武・長南 実編訳『邦訳日葡辞書』（1980年、岩波書店）

注7 諸橋轍次著『大漢和辞典』全12巻、索引1巻（1968年、大修館書店）

『御堂関白記』に見られる病氣・怪我に関する単語一覧

〔色〕——『色葉字類抄』, ○×はその単語の掲載有無を示す。

〔名〕——『類聚名義抄』にその単語が載っていることを示す。

1 名詞(相当語) (1) 和語

	単語	読み方	〔色〕	用例数
1	足	あし	○	11
2	労	いたはり	×	2
3	面	おもて	○	2
4	頭	かしら	○	2
5	風	かせ	○	1
6	疵	きず	○	2
7	心地	ここち	×	35
8	心	こころ	○	1
9	腰	こし	○	3
10	殊事	ことなること	×	25
11	舌	した	○	1
12	咳病	しはふきやみ	×	12
13	脛	すね	×	1
14	太波事	たはこと	×	1
15	悩氣	なやましけ	×	29
16	悩	なやみ	○	46
17	齒	は	○	6
18	鼻	はな	○	1
19	腫物	はれもの	×	1
20	膝	ひざ	○	2
21	眼	まなこ	○	2
22	耳	みみ	○	1
23	胸	むね	○	7
24	目	め	○	14
25	病	やまひ	○	23
26	瘡病	わらはやみ	○	4
計				235

(2) 字音語

	単語	読み方	〔色〕	用例数
1	暗夜	アンヤ	×	1
2	行歩	キヤウフ	×	2

3	霍乱	クワ克蘭	○	6
4	時行	シキヤウ	○	4
5	疾疫	シツエキ	×	1
6	邪氣	シヤケ	○	2
7	心神	シンシン	○	33
8	頭風	ツフ	○	4
9	熱	ネツ	×	9
10	病死	ヒヤウシ	×	1
11	病者	ヒヤウシヤ	×	1
12	病悩	ヒヤウナウ	×	2
13	風病	フヒヤウ	×	14
14	痢病	リヒヤウ	○	4
計				84

2 動詞(相当語) (1) 和語

	単語	読み方	〔色〕	用例数
1	労	いたはる	○	53
2	痛	いたむ	○	1
3	愈	いゆ	○	1
4	得	う	○	4
5	失	うしなふ	○	1
6	打	うつ	○	1
7	打破	うちやふる	×	1
8	起	おく	×	1
9	発	おこる	○	19
10	知	しる	○	2
11	損	そこなふ	○	2
12	堪	たふ	○	2
13	垂	たる	○	1
14	突	つく	○	1
15	取	とる	○	2
16	悩	なやむ	○	106
17	成	なる	○	3

『御堂閨白記』に見られる病氣・怪我に関する表現

18	似	にる	×	3
19	吐	はく	○	1
20	腫	はる	○	2
21	冷	ひやす	×	1
22	踏立	ふみたつ	×	1
23	見	みゆ	×[名]	3
24	病	やむ	○	3
計				125

(2) 字音語 (漢語サ変動詞も含める)

	単語	読み方	[色]	用例数
1	減	ケンす	○	1
2	辛苦	シンク	○	1
3	発動	ハツトウ	×	17
4	平復	ヘイフク	○	4
計				23

3 形容詞 (相当語) (1) 和語

	単語	読み方	[色]	用例数
1	明	あかし	○	4
2	重	おもし	○	63
3	暗	くらし	×[名]	3
4	難堪	たへかたし	○	10
5	無力	ちからなし	×	2
6	悩	なやまし	×	4
7	宜	よろし	○	38
計				124

(2) 混種語

	単語	読み方	[色]	用例数
1	如例	レイのことし	×	1
計				1

4 形容動詞 (相当語) (1) 和語

	単語	読み方	[色]	用例数
1	盛	さかり (なり)	○	2
計				2

(2) 字音語

	単語	読み方	[色]	用例数
1	尋常	シンシヤウ	○	8
2	不覚	フカク	○	16
3	平常	ヘイシヤウ	×	1
計				25